



BOOK

interview

もりしたのりこ
…1956年、神奈川県生まれ。
日本女子大学文学部国文学科卒業。
大学時代から『週刊朝日』のコラム
「デキゴトロジー」の取材記者
“典奴”として人気を博す。
連載をまとめた『典奴どすえ』をはじめ、
ルポライター、エッセイストとして活躍。
お茶を通じたエッセイ
『日は好日』はベストセラーになる。

森下典子さん

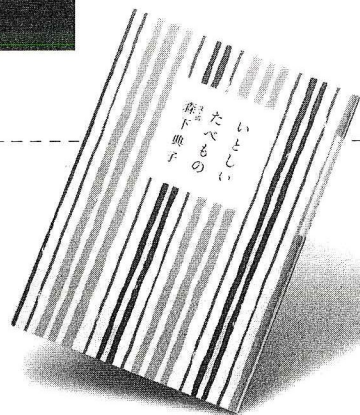
ひと口食べたときに甦る思い出。
おいしいと感じるものには、
そんな人の思いが込められている



飾

らない視線で書いたベストセラー
「エッセイ『日は好日』」の著
者・森下典子さんの最新刊、身近な食
べ物について綴ったのが本書『いと
しいたべもの』だ。懐かしい味の記憶と
ともに、その食べ物にまつわる個人的
な思い出が匂い立つように描かれる。
お客さまから頂戴したカステラをひ
とりでこっそり食べ過ぎて寝込んでし
まったこと。憧れていたメロンパンを

はじめて食べたとき、中が普通の白い
パンでがっかりしたこと。くさやのク
セのある旨みとアントニオ・バンデラ
スのフェロモンの共通点……などな
ど。何気ないことに森下さん独自の視
線が鋭く吸い寄せられる。
「読んで一緒に食べているような気持
ちになっていただけたらうれしいで
す」。もちろんなれます！
登場する食べ物にはノリの佃煮やカレ



いとしいたべもの 世界文化社/1470円

「ライスなど、どれも特別なものではないのに、思い出とともに語られると俄然、それらのものが色づいてくる。挿絵も自ら初挑戦して彩りを添える。思い出の多くは家族と囲んだ食卓や、両親の言葉だったりする。とくに森下家の台所を守るお母さまの姿は、細かく描写されているわけではないが読者に伝わってくるはずだ。

「母の作ってくれたものには絶対的な信頼感がありますね。昭和30年代にこの家庭でも作られていた夕食が当たり前前にあつたし、その味が私の『おいしい』という幅を作る味でした。その味が好きか嫌いか、という味覚は、自分の基礎の深い部分、自分の感覚を信じることでもあります。それは学校では教えてくれないし、じつは生きていくうえで大切なこと。『何を食べたか』よりも『だれと食べたか』。そのときの思いのほう为荣養になるのではないでしょうか」。懐かしい日本の食卓と家族の光景とともに、「おいしさ」についてもう一度きちんと考える機会を与えてくれるエッセイだ。

取材文 石井美佐 撮影 後藤さくら

1070キ 5/17号